

2003年春の出来事 様々な保護や救助がありました、典型的な例をご紹介します

1, 逗子海岸での母子救助



新年度草々、逗子にお住いの方から野良犬が子犬を出産しているとの救助依頼が寄せられました。母犬は、週末だけオープンするサーフボード置き場の中で、子犬数頭を出産し、餌を食べるが、一人では保護できそうにもなく、また、子犬の居場所も分からないとの事。早速、北浦が運転が出来ない状態なので、ボランティアさんとレンタカーを手配し、各種の「捕獲道具」を積み込んで現場に向かいました。

写真1は、現場の全景です。まず、餌で母犬をおびき寄せ、騙しながらでも簡単に首輪をかけることが出来ました。一般の方では難しいかも知れませんが、声をかけながら、驚かさないうちにゆっくり行えば、人前に出てくるような犬の場合には、比較的安全に行うことが出来ます。殺気を出さないことがコツなのですが。

次は、子犬の番です。サーフボード置き場の持ち主に連絡を取り、敷地内に入る許可を得ようと思いますが、保護してくれるならばと、横浜から駆けつけてくれることになりました。正攻法で話せば、皆さん協力的になって下さるものです。

子犬のいる場所は、敷地の一番奥。斜面に建っている物置小屋の床下でした。写真2のように、床下におかれている雑多な物を除きますが、奥になるに従い狭くなり、子犬がいる場所は一番奥の、十センチほどの隙間に穴を掘って隠れています。到底、人の手が入りませんので、捕獲用の大きな網を差し込んで、無事に4頭の子犬を保護することが出来ました。写真3。母犬の経緯はよく分かりませんが、飼い犬であった事は確かですが、放浪生活が長かったようにも思えます。



母犬はセーラ、雄はヘンリーとオニール、雌はピコとクープと仮の名前を貰って元気に保護生活を始めました。まだ完全に離乳はしていませんが、5月の末か、6月には新しい家庭に送り出せるようになるでしょう。

←ご飯を食べて、眠たくなったセーラとオニール、ピコ。

セーラはとても賢く、子犬は本当に可愛い兄妹です。

2. あるリハビリの記録

YDRが迎える犬たちの大半は、肉体的にも精神的にも傷つき、普通の神経では触れない程、醜く汚らわしい犬たちもいます。そのような状態の犬たちを、回復させるのは忍耐が必要ですが、徐々に生氣を取り戻してゆく犬を見るのは楽しい作業です。その典型的な例、キキについて、お話しいたします。

2001年の夏、一頭の犬が紀伊半島で保護され、横浜に送られてきました。右の写真二枚が到着当時の姿です。

全身が疥癬に犯され、体毛はかすれて、皮膚が見えているところは瘡蓋になっています。左の前足は、幼犬の時に骨折していたらしく、曲がっています。後肢の膝蓋骨(お皿)は正常な位置から外れて脱臼していて、歩要もギクシャクしています。また、発育不全の為に全身の骨格が細すぎて、まともに立つことも、正しく座ることも出来ません。両目は内反症という、瞼が内側に入っている奇形で、何時も涙を流しています。

このような状態ですから、犬種も良く判明できず、多分、フラット・コーテッドではないかと保護者は想像していますが、YDRではアイリッシュセターでは?と、なにやらクイズのような犬でした。徐々にフラットだと断定できるようになりましたが、

流行を先取りした繁殖業者が、売れない子犬を劣悪な環境下で育て、手に余らした上に、人も通らない山中に遺棄したのではないかと、考えています。

社会性の乏しさや、発育の度合いから、ケージから出して貰った事がないように思えます。何時までも人の手をペロペロと舐め続け、気はよい犬なのですが、排泄などの習慣も最悪です。

これから、キキと一緒に病気や奇形との戦いが始まりました。まずは、腸内にいる寄生虫の駆虫を様々な種類の駆虫薬で行い、同時に、疥癬の治療を徹底的に行います。

毎日、獣医師に注射をしていただくのですが、行き帰りの車中では必ずウンチまみれになってしまいます。その次は、体格の構築で、骨や関節に負担をかけないように注意しながら、食事や自由運動で体格を整えてゆきます。

半年後から、骨折して曲がったまま固定されている左前肢を修正する為の整形手術。両膝の膝蓋骨が、それを支える靭帯と共に正常な位置に無いために、全体の機能を移動させる大手術が続きました。根が明るい犬ですので、手術後も手は掛からないのですが、それぞれの手術後には安静にしなければならない三ヶ月間を、他の犬と一緒にさせられない為に、散歩や庭で遊びを一頭で行うために作業時間が大幅にとられと、なかなか大変です。

2003年に入り、何時も涙ぐみ、瞼が半分ふさがった状態の内反症の手術を両目に行いました。中程の写真は、術後一週間ですが、目の回りを剃られているためにパンダのようになっていますが、目も開き、ますます友好的な明るい性格が出てきました。写真は、フェンスの向こう側にいるボランティアのお嬢さんに近寄りたくて、立ち上がっている所ですが、以前でしたら、後肢だけでこのような姿勢をとることなど、到底無理は事でした。体格や毛並みの綺麗になってきているのが、お分かりになるでしょうか? 元気いっぱいの子犬の完成です。一才弱から二年間という犬にとっては大切な時期を、保護生活で送らなければ成りませんでした。それなりの成果はありました。

この5月中旬に、キキのようなお馬鹿ちゃんでも明るい犬と一緒に暮らしたいという、元気のいい家庭に迎えられることも決まりました。これも、高度の技術や適切な判断が出来る獣医師と、皆様のおかげです。有り難うございました。Yokohama,DOG RESCUEには、まだまだ同じような状態の犬が多く、また、次の保護犬も迎える事でしょう。

2003年5月 Yokohama,DOG RESCUE 北浦

